

市バスの運転席にて

松山義則

先日、たまたま市バスの最前列の席にすわることとなった。運転席がよく見とおせる。車庫につくと、乗務員が交代するとアナウンスして運転者は席をたつた。つぎの乗務員のために椅子の背もたれを整え、料金かばんを手にもたせかけて下車した。扉のところに立つて交代員を待っている。ほどなく三十代後半にみえる乗務員がきて、二往復のガソリンは大丈夫かと問いかけている。先の乗務員がまた乗りこんできて計器を確かめ大丈夫と答えている。交代が終ると車は静かに発車した。ベテランらしいおちついた運転である。若い学生らしい女性が一万円札を出して両替を求めにきた。両替のための小さな札がないと答え、小銭をもっていないかと問うている。一〇〇円硬貨ならあるかもしれないという。それでは一〇〇円だけ払って、あとの分はつぎにバスに乗ったときに支払っておいて下さいと運転しながら話している。この運転台の出口では停留所ごとに小さな出来事がつぎつぎに起る。財布から小銭が出てくる。時間のかかる人、つり銭受けにお金を残す人などである。乗務員は小銭を早く用意しておいてほしいとか、気をつけて下さいとかとげとげしい言葉を全くつ

かわない。

三十数年前に、オハイオ州のアクロンからコネチカット州ニューヘヴンまで、グレイハウンドのバスで一昼夜の旅をしたときの乗務員も親切であった。ニューヨークをすぎてから乗りすぎないように緊張している私に気を配っていてくれた。ロンドンの二階立てバスから下りて観光旅行者らしくカメラをバスに向けたとき、乗務員は微笑をうかべて手をふってくれた。人と人との間の小さな心のふれあいが日常生活のなかに生じ、暖かい思いにつつまれている。このような善意にあふれる人たちとは別に、人間の対立、競争そして憎悪のきびしい現実がある。自己の考え方、信条以外のものへの徹底した不寛容、自己の利益や味方以外のものに対する敵意。正義、正道という思いこみが自己保存と自己拡大の合理化となり、小さな親切や甘い善意は意味がないどころか危険でさえあるという。

人間の歴史は闘争のくりかえしであった。帝国主義や国土拡張政策は決して遠い昔のことではない。人間の宿命のなかで他人を苦しめまた悲劇のなかに死んでいった人びとは多い。われわれ人間のもつ有限な能力、感性と小さな考え方でどれほどに真実に近づくことができるかは疑問である。地上には数多くの大切な若い生命が育ちつつある。できるかぎりその人の自由で、できるかぎり相互の自由を尊重し、異質であることを知りながらも互いに共生する世界がつかかわれるようにと誰もが願うことであろう。どうも有難うと私は声をかけ、彼もにこやかに有難うございませと答えてくれた。バスは私の前をすぎ去っていった。

(同志社総長・理事長)